

平成30年6月6日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26283021

研究課題名(和文) 歴史と現状からみた庭園の観光資源としての可能性に関する研究 - 欧州との比較から

研究課題名(英文) Comparative Study on the Potential of Gardens as Touristic Resources in Japan and European Countries through its Past and Present

研究代表者

小野 健吉 (ONO, KENKICHI)

和歌山大学・観光学部・教授

研究者番号：40194584

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,100,000円

研究成果の概要(和文)：観光資源として人気が高い日本と欧州の庭園を対象に、現地調査や研究会開催等によって、庭園が観光資源として機能するようになる歴史的経緯ならびに庭園観光の現状についての研究を進めた。その結果、歴史的には、日本では18世紀末には京都で庭園観光の一定のシステムが整えられていたこと、イタリアではローマにおいて16世紀に庭園公開の慣習が始まり、英国でも18世紀末までには特定階層を対象とした庭園観光が成立していたことなどが明らかになった。また、現在の観光資源としての庭園の運営においては、文化資源・自然資源という庭園の両面性に留意し、丁寧な管理、的確な情報提供、適切な事業展開などが求められること等を指摘した。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the history and present situation of gardens functioning as popular touristic resources in Japan and European countries through on-site researches, document researches and symposiums. The study revealed the following historic facts for example: 1) the system of garden tourism had been organized in Kyoto by the end of the 18th century; 2) the custom of opening private gardens to the public started in Rome in the 16th century; 3) the garden tourism for the particular classes had been established in England by the end of the 18th century. On the other hand, as for the present management for the historic gardens functioning as touristic resources, following points can be mentioned: 1) it is necessary to take attention that gardens have both cultural and natural aspects; 2) careful maintenance, correct and plain information offering, and appropriate event planning are essential for the visitors' satisfaction.

研究分野：観光学

キーワード：庭園 観光 庭園観光

1. 研究開始当初の背景

日本の歴史的庭園(日本庭園)は文化財として高く評価されるとともに、観光資源として内外の観光者の人気を集めるものも少なくない。そうしたなか、造園学において日本庭園に関する研究の中心をなすのは、その空間構成・意匠や歴史の変遷に関する研究ならびに作庭者の特定や作庭の意図の解明に関する研究等であり、日本庭園の利用に関する研究はある程度見られるものの、とくに観光に焦点をあてた研究は極めてまれであった。一方、観光学の側から観光資源としての庭園の在り方に着目した研究もほとんど見られないのが実情であった。

日本における政策的な重点事項として観光がとりあげられる時代背景のなかで、こうした研究状況に鑑みれば、観光資源としての日本庭園の歴史と現状を明らかにする研究が強く求められる状況であったと言える。そして、そうした研究から有益な研究成果を得るためには、日本庭園を対象とした研究のみならず他国での状況との比較研究が望まれるところであった。庭園が観光資源として広く活用されているのは、日本以外では英国やイタリアといった欧州諸国であることから、こうした欧州諸国での庭園観光の歴史と現状を知り、日本庭園における状況との比較研究を行うことは、日本庭園の観光資源としての在り方や可能性(ポテンシャル)を考えるうえでも有益であるとの考えに至った。

以上が本研究の研究開始当初の研究着手の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、観光学・造園学をはじめとした学際的視点から庭園をとりあげ、わが国における庭園と観光利用の歴史的過程や現状を考察したうえで、欧州との比較研究をふまえ、日本庭園がもつ観光資源としての可能性(ポテンシャル)を考究することを目的とする。すなわち、庭園の在り方(形態・機能・所有管理等)と観光、文化財としての庭園保護と観光資源としての活用の関係などを、観光学および造園学(庭園史)等の観点を融合することにより明らかにしようとする試みである。さらに具体的には、観光資源として機能している日本の文化財庭園の調査に加え、文化遺産としての評価が高く観光活用も盛んな欧州諸国の歴史的庭園の現地調査を行うなどして、日本と欧州における庭園の観光資源化の過程やその運営の在り方等を明らかにすることを目指す。

以上のとおり、本研究は、これまで観光資源としての観点からの考究が必ずしも十分ではなかった庭園に着目して研究を進め、わが国における庭園観光の魅力を高め、庭園観光が国際競争力の高い魅力的な観光地形成に資するための基礎資料を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するためには、空間軸としては日本と欧州、時間軸としては庭園公開の動きが芽生えるおおむね16世紀から現在までを対象に、庭園観光という事象を多面的にとらえる必要があった。そのため、まず研究対象を日本と欧州に分け、それぞれについて文献調査・現地調査を実施した。日本の文献調査では、『鹿苑日録』等の中近世資料からの庭園関連記事の抽出などとともに、『都名所図会』『都林泉名勝図会』といった近世絵画資料についての検討も重点的に行った。現地調査としては、近世の大名庭園である栗林公園・旧浜離宮庭園、近代庭園である三溪園などを対象に管理者に対するヒヤリングも含めて実施した。欧州については、英国におけるイングリッシュ・ヘリテージやナショナル・トラストが運営管理する庭園の現地調査および文献収集等を中心に、イタリア等に所在する観光資源的活用の盛んな庭園の現地調査を実施した。

第2年度にあたる平成27年度から最終年度の平成29年度までは3回にわたって「観光資源としての庭園」に関する研究会を開催した。この研究会は、庭園観光に係る造園学(庭園史学)・建築史学・文化遺産学・文学等の研究者ならびに歴史的庭園運営管理実務者等の発表をもとにして議論を行う形式をとり、このうちの第2回(平成28年度)には、研究発表と議論参加のため英国とイタリアから研究者を招聘した。この一連の研究会は、本研究の成果に多様性と学際性を付加するのに大きな役割を果たしたと考えられる。研究会の成果は、研究代表者の編集により『観光資源としての庭園(1)』(平成27年度研究会報告書)、『観光資源としての庭園(2)』(平成28・29年度研究会報告書)として刊行した。

4. 研究成果

(1) 日本における庭園観光の歴史的研究

近世以前の文献資料からの研究としては、『蔭涼軒日録』『隔菴記』『鹿苑日録』などの中近世資料から庭園関連記事の抜粋・整理等の基礎作業をおこなった。

また、江戸時代後期の絵画資料である『都林泉名勝図会』(秋里籬嶋著・1799年刊)、『都名所図会』(秋里籬嶋著・1780年刊)については、挿図の多面的分析等に基づく研究を進めた。まず、『都林泉名勝図会』では挿図に描かれた人物の属性分析や関連文献に基づいた考察を進め、江戸時代後期(18世紀末)の京都の庭園観光の在り方として、庭園観光者は男性が多く、男性の中でも武士が高い比率を占めること、この時期には京都の庭園観光はいくらかの入場料を支払えば自由に見物できるという今と変わらないシステムがすでに出来上がっていたとみられること、女性の庭園観光者がみられるのは、有名庭園と花が楽しめる庭園などに限られる

こと、などの結論を得た（小野健吉「江戸時代後期の観光資源としての京都の庭園」『観光資源としての庭園（1）』2017）。また、『都名所図会』については、記述および挿図の景観分析ならびに『都林泉名勝図会』との比較検討などをもとに、庭園観光は一定の歴史的知識を前提にした観光と考えられていたこと、江戸時代後期の京都において金閣寺と銀閣寺は、現在と同様に庭園観光の中心であったこと、京都盆地周縁部に立地する寺院では、寺院内の庭園・寺院境内とその周辺・京都盆地がいわば入れ子の庭園的空間を形成していたと解釈できること、などの結論を得た（小野健吉「『都名所図会』にみる観光資源としての庭園」『観光資源としての庭園（2）』2018）。

近代については、現在の文化財保護法の前身の一つである史跡名勝天然記念物保存法（1919）によって「名勝」に指定された243件を整理し、それらの指定には「観光」の観点が見られることを指摘。さらに、そのうちの庭園に着目し、現在の観光資源としての評価と対照しながら考察を進め、史跡名勝天然記念物保存法による名勝指定庭園のなかでは、著名な大名庭園と早い時期に指定を受けた京都の庭園が現在も観光資源として人気が高いとの結果を得た（井原縁「近代の文化財保護制度等と庭園の活用」『観光資源としての庭園（1）』）。

（2）日本における庭園観光の現状に関する研究

日本の庭園観光の現状に関する研究では、寺社庭園は入場者数等の具体的な統計資料の入手が困難であるという事情から、地方公共団体等が運営している庭園を考察の対象とした。具体的には、栗林公園（高松市）、旧浜離宮庭園・小石川後楽園・六義園（東京都）、三溪園（横浜市）を対象とした研究を進め、研究会では岡山後楽園（岡山市）、無鄰菴（京都市）の事例に関する研究の発表を得た。

栗林公園は、江戸時代に高松藩の別邸であった栗林荘が明治時代に公園と位置付けられ、香川県 대표적인観光資源として「大名庭園」と「公園」の両面の価値からの活用がなされていたが、1975年以降は「大名庭園」としての価値を重視する方向に管理運営方針が転換され、特に2000年以降は庭園としての観光活用に沿った施策が展開されている。この間の状況を取りまとめたうえで、植栽や水などの自然材料が重要な構成要素となる庭園の価値を担保するうえでの維持管理体制の重要性を指摘した（井原縁「栗林公園の管理と活用」）。

東京都が所管する文化財庭園のうち旧浜離宮庭園・小石川後楽園・六義園の3か所の活用の状況について、入園者数の経年統計・月別統計、外国語パンフレット配布状況統計、イベント開催状況等に基づいて分析を進め、

これらの文化財庭園の一層の活用に向けた課題と展望を以下のとおり示した。適正な入園者設定とその確保・維持、入園者満足度の維持または向上、入園者数の端境期解消に向けた取り組み、費用対効果に留意した夜間イベントの開発と実施、情報発信の充実、関連施設・関連庭園との連携、入園者属性を想定した運営、価値に見合った料金設定、である（小野健吉「東京都所管文化財庭園の観光を含めた活用の展望」『観光学』16号）。

無鄰菴は明治時代に築かれた山縣有朋の京都別邸で、山縣の構想のもと小川治兵衛が手掛けた庭園は東山を借景とする優れた庭園として名勝に指定されている。無鄰菴庭園では、2007年度から導入されたプロポーザルによる庭園管理において、東山の顕在化や野花を生かした芝生管理といった山縣の感性を読み取った手法が取り入れられている。さらに、2016年度以降の指定管理者制度の中では、チケットの工夫、開園時間の延長や施設貸出しの推進、庭師による庭園ガイド、といった取り組みが行われ、これらが入園者の増加や満足度の向上に役立っている実情が紹介された（加藤友規「無鄰菴の庭園管理と運営」『観光資源としての庭園（2）』）。

（3）欧州における庭園観光の歴史的研究

研究会において、イタリア、フランスおよび英国における庭園観光の歴史に関する研究の発表を得た。

イタリアでは、中世からルネサンスにかけて庭園の周囲の壁が取り払われ、庭園が風景に向かって開かれていくのに伴い、その機能もまた開かれたものになっていく。特に16世紀のローマにおいては、前世紀から流行した古代遺物のコレクションの規模が拡大して庭園がその展示空間として用いられるようになり、その収集品の公開が貴紳の義務という考えも芽生えた。16世紀の末になると古代遺物収集品を伴う庭園は、一般市民や外国人にまでも広く公開されるようになるのである（桑木野幸司「文化的景観とイタリア・ルネサンス庭園」『観光資源としての庭園（1）』）。

18世紀の英国の庭園観光については、『ハイランド紀行』（W・ギルピン）、『ホークストンの描写』（H・ローデンハースト）といった資料からその実情を窺うことができる。具体的には、隠者の庵やエデンの園をイメージした空間を備え、本来的には私的な空間であった庭園が、この時代になると観光資源としても機能するようになるが、こうした庭園を訪れる階層は一部の富裕層に限られていた。19世紀にはいと庭園観光は拡大していくが、そこでは自ら好むところの「趣味」を訪問者に「教育」しようとする所有者たる富裕層側の意識と、富裕層の持つ庭園空間を共有しようとする訪問者側の意識が表裏をなして発展していった

と見ることができるのである(今村隆男「イギリス庭園観光と「趣味」」「観光資源としての庭園(2)」)。

18世紀に始まる英国の庭園観光であるが、貴族のカントリーハウス庭園を対象とするこうした観光が広く一般に行き渡るのは、実は20世紀も後半の1970年代からのことであった。地所経営を基盤とする貴族による庭園を伴ったカントリーハウスの管理運営は、産業の中心が地方から都市へと移る1870年代以降に経済面から苦境に陥り、さらに第一次・第二次世界大戦により決定的な打撃を受ける。1937年にはナショナル・トラストが貴族邸宅の所有管理に取り組みようになるものの、1960～70年代にかけての英国経済の低落と課税制度の変更等によりカントリーハウスの敷地を手放す貴族が急増し、邸宅と庭園は荒廃する。こうした状況の中で、1974年の展覧会「カントリーハウスの破壊：1875-1975」を契機としてようやくその保存運動が本格化する。庭園を伴う貴族邸宅は英国が誇る文化遺産であるとの認識のもとにその保存管理が図られるようになり、あわせて広報活動によって国内他地域や海外からの観光客も増加するのである(松田陽「英国貴族邸宅庭園の観光資源化」『観光資源としての庭園(1)」)。

(4) 欧州における庭園観光の現状に関する研究

英国のストウ、スタッドリー王立公園、チズウィック・ハウス、イタリアのヴィラ・デステ、イゾラ・ベッラ、ドイツのムスカウ庭園、サンスーシ宮苑、オーストリアのシェーン・ブルン等の庭園現地調査を行い、資料収集・写真撮影等を行った。また、英国ではイングリッシュ・ヘリテージ図書館での文献資料調査も実施した。

イングランドで「発明」された風景式庭園は、それまでのヨーロッパにおける整形式庭園の伝統から脱却し、自然の中でみられる曲線や地形・樹木のありようを重んじたデザインを持ち、この様式は広く欧州全体でも人気を博した。英国に残る風景式庭園の代表的な事例であるストウとスタッドリー王立公園については現地調査・資料収集に基づき、以下の現状と課題を把握した。ナショナル・トラストにより運営される両庭園は良好な維持管理と適切な運営で魅力を保持・増進していること、近隣の住民の余暇・散策空間であるとともに、観光資源としても機能していること、公共交通機関によるアクセスが困難であるため外国人観光客にとっては訪問が容易でないこと、等である(小野健吉「英国における「資源」としての風景式庭園」『奈良文化財研究所紀要2015』)。また、この2か所にイングリッシュ・ヘリテージが庭園の管理と運営を担うケニルワース城とチズウィック・ハウス、私設財団による管理運営がなされるヘアウッド・ハウスとハンプトン・コ

ートを加えた6庭園を対象に、運営者による運営手法の違いにも着目した研究を進めた。ナショナル・トラストが観光資源としての活用に比較的積極的であるのに対し、イングリッシュ・ヘリテージは学術的価値の還元やや重きを置いた運営がみられるといった特色を把握したうえで、英国においても誰に対してどのような説明を行うかはまさに個々の庭園の特性によることを確認した(田代亜紀子「英国における庭園観光と庭園保存に関する一考察」)。

さらに、英国において内外からの観光客を集める重要な資源である庭園は、公開期間の長短はあるものの数千か所が公開されており、イングリッシュ・ヘリテージ・トラストも23か所の歴史的庭園を運営するとともに、しっかりとした調査に基づく庭園の復元・修復等のプログラムにも取り組んでいる現状が紹介された(John Watkins “The English Heritage Trust and Historic Parks and Gardens Presentation and Tourism”『観光資源としての庭園(2)」)。

本研究の成果としては、研究代表者・研究分担者による学術雑誌等の発表論文が5編、研究会報告書掲載の論文が8編である(「5. 主な発表論文等」下線)。さらに、2冊刊行した学術図書(研究会報告書)には、上記(1)～(4)に概要を示したものを以外に庭園観光関連論文10編が収められており、あわせて今後の庭園観光研究に寄与できるものと考えられる。刊行した図書については、関係者・関係機関に配布するとともに、国立国会図書館に納入して広く国民によるアクセスを可能にした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

小野 健吉「三溪園の活用と運営の展望」『観光学』18号 pp.63-72、査読有、和歌山大学観光学会、2018年3月

小野 健吉「東京都所管文化財庭園の観光を含めた活用の展望」『観光学』16号 pp.25-38、査読有、和歌山大学観光学会、2017年3月

井原 縁「近代の文化財保護制度と庭園の観光活用」『地域創造学研究』33号、pp.143-169、査読無、奈良県立大学、2017年3月

小野 健吉「英国における「資源」としての風景式庭園」『奈良文化財研究所紀要2015』pp.40-41、査読無、奈良文化財研究所、2015年6月

井原 縁「地域資源としての栗林公園」『百十四経済研究所調査月報』337号、pp.22-29、査読無、百十四経済研究所、2015年3月

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

小野 健吉編 『観光資源としての庭園 (2)』科学研究費成果出版物、185pp.、2018 年 3 月

万城 あき「岡山後楽園の歴史と活用の現状」/小野 健吉「東京都所管文化財庭園の運営と活用」/井原 縁「栗林公園の管理と活用」/加藤 友規「無鄰菴の庭園管理と運営」/ Alberta Campitelli “Historical Itinerary of the Villas and Gardens of Rome: Restoration and Management” / John Watkins “The English Heritage Trust and Historic Parks and Gardens Presentation and Tourism” /平成 28 年度研究会総合討議記録/大橋 直義「庭園をめぐる物語」/小野 健吉「『都名所図会』にみる観光資源としての庭園」/井原 縁「大名庭園の観光利用状況に関する考察」/今村 隆男「イギリス庭園観光と「趣味」」/田代 亜紀子「ガーデンツーリズムにみる歴史的庭園の保存と活用」/桑木野 幸司「初期近代イタリアのヴィッラにおける庭園の自己表象とランドスケープ絵画」/エマニュエル・マレス「画家クロード・モネの庭をめぐる考察」/平成 29 年度研究会総合討議記録

小野 健吉編 『観光資源としての庭園 (1)』科学研究費成果出版物、89pp.、2017 年 2 月

松田 陽「英国貴族邸宅庭園の観光資源化」/田代 亜紀子「英国における庭園観光と庭園保存に関する一考察」/佐々木 邦博「ヴェルサイユに見る庭園の観光」/桑木野 幸司「文化的景観とイタリア・ルネサンス庭園」/小野 健吉「江戸時代後期の観光資源としての京都の庭園」/菅沼 裕「絵葉書に見る近代京都の庭園へのまなざし」/井原 縁「近代の文化財保護制度等と庭園の観光活用」/(平成 27 年度研究会)全体討議記録

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 健吉 (ONO KENKICHI)
和歌山大学・観光学部・教授
研究者番号：40194584

(2) 研究分担者

井原 縁 (IHARA YUKARI)
奈良県立大学・地域創造学部・准教授
研究者番号：10458044

田代 亜紀子 (TASHIRO AKIKO)
北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：50443148